

令和6年度第2回函館市政策アドバイザー意見交換会 会議録

1 日 時 令和6年(2024年)12月19日(木) 15:00～17:40

2 場 所 函館国際ホテル2階「鳳凰」

3 発言内容

市長挨拶・資料説明

大泉市長

- ・日頃より当市の市政運営にご尽力・ご支援をいただき感謝申し上げます。また、本日はご多忙のところご参加をいただきまして厚く御礼を申し上げます。
- ・前回意見交換会における皆様からのご意見をキーワードに分類し、整理した。資料の2ページはキーワードを8つの付箋として、青の菱形の Well-Being 向上と赤の菱形の人口危機対策(社会減抑止)、両方が重なる部分にそれぞれ配置した。また、それに基づき、3ページ以降の意見の反映(施策展開の方向性)を作成した。
- ・「施策展開の方向性」が何らかの市の計画になるということではなく、アドバイザーの皆様からの多くのご意見を市政運営に反映させていくためのインターチェンジ的な役割を担うものと考えている。
- ・これらについては、すぐできるものは着手し、予算が必要なものは予算化して、中長期的な取り組みなどは、市が今後策定する計画やビジョンに反映させるなどして具現化してまいりたい。
- ・産業・雇用(所得向上)については4本の施策の方向性を立てている。
- ・ゼロカーボン環境創造都市の形成について、北海道は全国でも随一の再エネポテンシャルをもっており、特に道南地方は洋上風力発電を始め、大きな期待が集まっている。
- ・持続可能な水産海洋都市の構築である。三方を海に囲まれた本市にとって非常に重要な項目である。北欧では若者の憧れの就職先は漁業であり、サーモンをはじめとする養殖産業が大きな基幹産業になっている。そうした視点から、海藻類の完全養殖技術と事業化推進などを列挙している。
- ・起業促進・スタートアップの創出については、北海道大学との包括的協定締結に向け、現在調整している。
- ・観光競争力の強化と創造的観光地への進化については、湯の川温泉の集客力がかつてのパワーを失っているという状態であることから、このブランドを再生・復活させ、新たな核を作ることができれば函館全体の観光集客力が倍加する可能性を秘めている。また、新函館北斗駅をハブとした新時代の広域観光をデザインしていく。
- ・ジェンダー平等については、今がある意味最後のチャンスと言ってもいい。本市の場合、女性の方が多く流出し、そしてまた戻ってこないという状態である。ジェンダー平等は、リーダーがメッセージを発しなければ進まない分野であり、市長フルコミットメントで頑張っていきたい。
- ・教育については、前回の意見交換会での意見を踏まえた施策の方向性を提示している。
- ・続いて、都市ブランドだが、高揚感を生み出す新たな変化、国際的知名度の向上と

掲げた。函館は中核市で最悪最速クラスのスピードで人口減少に直面しており、この負のスパイラルを逆回転することは非常に難しい。強力な切り札が必要となってくる。函館の場合は「都市の魅力度」だと思っている。ブランド総合研究所の調査で当市は最も魅力的な市町村という評価を受けている。大変ありがたいが、世界から見ればまだ誰も知らない状態である。国際的知名度を何とか上げていかなければならない。

- ・様々な権威ある雑誌やサイトがランキングを発表しており、これらの上位に躍り出ない限り、函館を知ってもらえない。事は急ぐ。4年以内に世界の都市ブランドのトップテン入りを果たす。そうした意気込みで邁進したい。
- ・次に、Well-Being の向上である。当市の政策がバラバラではないことや場当たりのではないことを示さなければならない。そのためにもパッケージで示さなければならないと思っており、翌年度の予算編成に向け、子ども・子育て、医療・健康、福祉、そしてジェンダーに関する重要課題や政策の基本的方向性を示す指針を、毎年度、策定していきたい。
- ・そのタイトルを「ウェルビーイング 22」としている。この「22」の意味だが、今日生まれた子どもは 22 世紀まで必ず生きる。次の世紀を正確に見通すことは不可能だが、見通せないとしても 1 世代後、2 世代後の子どもたちが暮らしていく社会を常に意識して、政策を議論しなければならない。私たち現役世代の責任感を込めて「22」という数字を象徴的に使っていきたい。
- ・これらの施策を実際に動かしていくためには、非常に困難性が高いものも多く含まれていることから、従前とは違った視点で検討し実行しなければならないと思っている。本日の意見交換会、さらには今後、個別に様々なご助言をいただいてまいりたい。
- ・最後に「インクルージョン未来都市・函館」の創造である。まちが普遍的価値を体現したり、象徴することがある。例えば、広島と言えば誰もが世界平和をイメージするように。市民が一体となって前に向かっていくときには精神的な支柱になる考え方が必要ではないかと思っている。それはまちの品格にもつながる。そうした意味を込めてインクルージョンは別に括った。
- ・資料の説明は以上である。よろしくをお願いしたい。

意見交換

市長

- ・それでは、資料に沿ったご意見、それ以外のご意見でも構わないので、順にご発言をお願いしたい。

飯村 亜紀子 氏

- ・前回の意見交換会後に市の公式 LINE に登録してお知らせをいただいたが、前回の意見交換会において出された意見に関連した具体的な取り組みが紹介されていた。市民の方はもとより政策アドバイザーにも市が具体的に取り組んでいることを紹介いただけるといいと思う。

- ・インクルージョンを各論に落とし込んで新たな取り組みにつなげられるといい。
例えば、観光とインクルージョンを掛け合わせるとユニバーサルツーリズム（高齢や障がい等の有無にかかわらず、すべての人が安心して楽しめる旅行）につながる。湯の川温泉の再興に向けて検討する際には、ユニバーサルツーリズムに対応して様々な人が楽しめるものを取り入れることも考えられるのではないかな。
- ・再生可能エネルギーもインクルージョンの側面がある。観光のほかに函館に強みのある産業があることでエネルギーの需給関係が生まれる。その上に災害に強いまちづくりができる。災害時に医療的ケアや障がいがある人にも対応しやすいまちづくりにもつながるという意味でインクルーシブではないかと思う。また、地域の外に出てしまうようなエネルギー費用が地域に落ちることで循環も生まれる。
- ・昨日、函館の港湾脱炭素化推進協議会が発足したと報道があったが、市民、企業、外部の投資家がそれぞれ「自分事」として取り組むことができるようなものが出てくればいいと思っている。

市長

- ・アドバイザーの皆様だけではなく、市民とも、もっと具体的な取り組みの情報共有共有をしていくことで大きな力が得られると思う。これからももっと情報発信をしていきたい。
- ・インクルージョンについても各論に落とし込むことを検討してまいりたい。

伊藤 隆敏 氏

- ・優先順位を付け、3年から5年ぐらいの期間で成果が期待できるものは重点政策として展開するのがいいのではないかな。
- ・一つは観光客に魅力のあるまちであること、もう一つは先端的な事業を展開していること、こうしたイメージが重要であると思う。
- ・函館といえばイカなので、完全養殖技術を確立できると非常に価値が高いものになるのではないかな。大学だけではなく産業界とも早期に連携することが重要ではないかな。
- ・観光業の付加価値の向上が非常に重要である。アニメなどのコンテンツは聖地巡礼の需要は大きい。函館はコナン、ゴールデンカムイなど関心を集めており、箱館戦争にスポットライトが当たってもいいのではないかな。
- ・市民の財産として付加価値を付けて収入を得る工夫が重要である。例えば、五稜郭や箱館戦争を仮想体験できるゲームやアプリを開発することや中高生などを対象に箱館戦争に関連した作文コンテストを開催することなどが考えられる。
- ・新幹線を函館駅まで延伸することのメリットは大きい。また、貨物新幹線、トレイン・オン・トレイン構想を実現することによって脱炭素にもつなげることができる。市とJRで協力して考えてほしい。

市長

- ・五稜郭の歴史はこれまでも大事にしてきたが、アニメやゲームといった新たな切り

口でより人を引き寄せる大きな鍵になってくると思う。国際的な知名度の向上は、コンテンツ産業を絡めていかなければ進まない。民間企業との連携を検討していかなければならないと思っている。

伊藤 正裕 氏

- ・2050年までのカーボンニュートラルの達成に向けては技術課題の解決が必要となる。函館は太陽光，風力，地熱を活用できるほか，空港，港湾もあるので物流面でも有利な条件にある。開発拠点があると全国から優秀な人材が集まるので設置してはどうか。
- ・例えば，再生可能エネルギー，自動運転，高齢者ケア・福祉，医療，バイオなど特定の業種を指定して，スタートアップを全国から募集し，市と民間の金融機関，ベンチャーキャピタル，投資家などが一緒にファンドをつくって支援してスタートアップを毎年創出していく。万一，1，2社が50年後に時価総額1兆円，2兆円の会社になれば函館の景色を全く変えてくれる可能性がある。リターンも税制的に市民に還元することができる。
- ・世界からニセコに集まっているが，そのような人たちは新千歳経由で入ってきている。それを函館経由で入ってもらうことができないだろうか。函館空港は3,000m滑走路を備えており，函館港もあるのでスーパーヨットで来ることもできる。ニセコへの海外客を札幌経由ではなく，函館経由のプライベートジェットの乗り入れを増やすことによって，函館での富裕層の滞在が生まれる。さらには富裕層の下層の憧れにもつながる。そうするとグローバルブランドホテルの誘致などのハードルが下がるのではないか。
- ・専門職人材が少なくなっている。専門職はこれからもニーズが高まるので，丸の内で勤めるよりも年収が上がっていく可能性がある。先を見据えて専門職人材育成のための教育というのでも検討いただければと思う。

市長

- ・教育，それからニセコと連動したブランド形成も，非常に重要だと感じている。
- ・函館では超富裕層をターゲットとしたビジネスについては手探り状態であるが，そうしたことも含めてしっかり取り組んでまいりたい。

大西 雅之 氏

- ・登別，洞爺，定山溪と比較すると，湯の川温泉の外国人観光客の割合は圧倒的に低い。
- ・これから間違いなく増えるのがダイレクトインバウンドである。市街地から近い函館空港の更なる強化と空港から湯の川，市内までのアクセスの強化が重要になる。
- ・湯の川温泉は一般的な温泉郷というイメージとは違っており，ビルが乱立するような印象を持たれているので中心市街地のホテルとの差別化ができなくなっている状況ではないかと思う。そういう意味では温泉街のシンボルを作ったり，夜間のライトアップをしたり，ストリートアートを施したりして魅力を高めてはいかかが。

- ・湯の川温泉の泉質や歴史をPRして、道内でも特別な温泉であることをアピールしてはどうか。
- ・「ゆのぶら」という湯の川温泉の体験型プログラムがあるが、あまり知られていないしスケールが小さい。行政も一緒になって取り組むことで大きなものにしていくと広がりを見せるのではないか。
- ・新幹線を活用したペット同伴旅行の拠点を目指してはどうか。そのためには、ホテルがペットと一緒に泊まれる宿に変わらなければならない。
- ・公共交通機関とレンタカー等の移動サービスを組み合わせて、その検索・予約・決済等をワンストップで行うことができるサービスに加え、観光施設の情報や予約・決済まで行うことができるサービス（観光MaaS）を南北北海道で取り組み、全道の観光MaaS整備の先駆けとなればいいのではないか。
- ・函館のワインの魅力が高まっており、もっとワイナリーを増やしてワインツーリズムを確立していけばいいと思う。

市長

- ・観光について大変斬新なご意見も含め、多岐にわたり貴重なご意見をいただいた。参考にしながらしっかりと取り組んでまいりたい。

塚原 月子 氏

- ・男女の就業機会に関する格差の現状として、例えば、職種によって何となく男性が付きやすいけれども女性がつきづらい、そういったものがあるのであれば、そのような職種でもジェンダーに関わらず活躍できるといったような啓発や関係する事業所への教育を行うことで、就業機会の均等化が図られるということがあるかもしれない。
- ・もしくは職種ではなくて、職位を上がっていくときの男女差が大きな問題となっている場合に、そういった職位を上がろうとする女性のリーダーシップやマネジメントの教育機会を小規模事業所単体で設けることが難しいのであれば、市がそういう機会を提供していくことも考えられる。
- ・大企業では従業員満足度向上のためサーベイを導入しているところが増えている。中小企業だと導入が難しいので、市としてガイドラインを示すなどすれば、現状とありたい姿のギャップを埋める手立てになるのではないか。
- ・インクルーシブ教育というコンセプトを前面に出してもいいと思う。
函館の自然や歴史に加え、再生可能エネルギーや国際性など未来を見据えた街であることを打ち出していくことができれば、従来型の教育でポテンシャルを発揮できていない子どもやその家族を惹きつける要素になるのではないか。公教育として、様々な人格だとか、ポテンシャルを持つ子どもに対して、インクルーシブ教育を提供していくことが、他のコンセプトと合わせても非常に親和性が高いのではないかと思う。そういった教育を初等教育から高等教育までつないでいけばグローバルな教育というところまで結びつけることもできる。
- ・スタートアップについては国内の投資だけを呼び込むのではなく、東アジアや環太

平洋地域の人やお金を呼び込めるといい。

- ・インクルージョン未来都市函館ということを普遍的価値として切り出し、掲げていることはよいが、文言からそれが函館のものであるとはわかりづらくなっている。函館を大切にすると人という心のつながりが見える描き方ができると、それが函館だからこそインクルージョンと言えるのではないか。

市長

- ・インクルージョン、インクルーシブは、バラバラではなく貫くものがあって実現できるということについて大変参考になった。

野村 修也 氏

- ・観光中心とした交流人口と定住人口をイメージしている部分が多く、真ん中に位置する関係人口にもう少しアイデアがあればよかったと思う。
- ・湯の川温泉は、松前藩士の方が難病に罹ってその治療のために訪れたのがきっかけと言われていると理解している。湯治という古くからある温泉の利用方法を前面に出し、長期滞在型の温泉利用のようなものを工夫することが関係人口の造成につながると思う。
- ・アスリートのスポーツトレーニングについては、科学的にデータを取ってその数値を分析しながら自分の能力を高めていくような方法に完全に変わっているので、データを収集・管理ができ、そしてアドバイスを受けられる施設があればアスリートがやってくるのではないか。また、低酸素施設内でトレッドミルを活用して走るとは高地トレーニングと同様の効果が得られる。また、体へのリスクが低い。こういった施設を設けてスポーツの聖地となることは十分可能であり、年に2か月くらいは函館に滞在する人が増えるのではないか。
- ・障がいがあるなど観光で来訪できない方々もメタバース空間内で観光することができ、分身ロボットを活用すると遠くにいても働くことができる。つまりデジタルを活用することによって様々な障壁を乗り越えられる状況になっているので、函館に来訪しなくても定住しているのと同じような効果が得られる。
- ・函館とつながる人をどんどん増やしていくことがこれからは一番大事ではないか。
- ・函館のファンクラブを作れば登録してくれる人が多く出てくるのではないか。そのメンバーこそが関係人口であり、何かあれば聖地である函館に結集してくれると思うので、そうした方々とのネットワークを確保しておくことが大事なことだと思う。
- ・株式会社の形で農地を所有することは一応できることになっているが、株式会社自体が非公開会社であることが条件になっていて公開会社はできないことになっている。例えば、耕作放棄地を持っている人が現物出資して株主になっていただくと、土地が株式会社の所有物になる。また、全国で函館の農作物に関心があったり、函館の農産物が好きだと思ったりした人に株主になっていただき、会社は大きく展開していただく。そうすれば、若者たちが函館に戻る場所ができる。
- ・ある一定期間、豪華客船に係留してもらい、ホテルやカジノとして使うことも魅力向上につながるのではないか。カジノ常設に抵抗感がある自治体も多いが、客船の

ホテルに宿泊している間はカジノが利用できるなどの条件を付せば問題は解決できるのではないか。また、カジノが設置されている豪華客船の中でのカジノ活動については、規制緩和してもらうことにより集客力を高めることもできるのではないか。

市長

- ・定住人口，交流人口，その間にあるのが関係人口だと捉えていたが，様々な視点から関係人口についてのアイディアを伺うと，もっと幅広い概念だとわかった。関係人口をどう増やすかというのは，市役所のどのセクションにも関わってくる。
- ・農業や客船ホテルのご提言についても，参考にさせていただきたいと思う。

長谷川 栄一 氏

- ・市長が前回の意見交換会で函館存亡への危機感を表しになって，今日はこれから向かう方向のある種のヒントみたいなものを出していただいた。一步一步進んでいると思う。しかし，資料で示されたキーワードのうち，ジェンダーを除くと目指そうとしていることは，かなり昔から国でも地方でも取り組んできたができなかったことだ。なぜできなかったのかということ，これだけの政策アドバイザーがいるので，皆さんの力を借りて一步一步進めたらいい。
- ・前回の指摘を受け，できることをやっていることは素晴らしいと思う。できることをどんどんやっていくことが大事である。その点，すぐ取り組むべきことを申し上げると，他のアドバイザーから以前，函館山のロープウェイで45分待ったという話があったが，それだけ待たされると二度と来たくなくなる人が多いはずだ。ロープウェイの待ち時間や混み具合を，ネットやタクシー，あるいは駅などでお知らせすることによって，先に函館山ではないところから回ってみようといった判断を観光客ができるようになる。お知らせすることはすぐできることだと思う。
- ・ISARIBI with と市長が会ったことはよかった。若者の意見を教えてもらい，共有したいという気持ちもある。
- ・前回，隈氏からバルセロナ，伊藤正裕氏からシアトルの話があったが，ともに世界的に素晴らしい港町である。経済界を中心に市職員も同行して良い街を見てほしい。世界のランキングを目指すことはとても大事なことであり，函館にはランキングに入ることができる可能性が十分にある。財源が厳しいのであれば，ふるさと納税の全収入を3年間それに振り向けるくらいのことをしてもいいのではないか。函館を世界に広げるために傾注して使ってほしい。ちなみに個人的なことだが，私もふるさと納税を函館市にしているが，来年少なくとも倍増する。
- ・私の散髪を担当してくれた女性が函館出身とのことだったので，函館に帰る気がないかどうか尋ねてみた。函館に戻ったらやりたい仕事はあるが，仕事が終わった後にレストランやバーに行っても家に帰る手段がないので，行くことができない。そのため出合いができないという反応であった。
- ・11月下旬に読売新聞に地方と女性という連載があった。地方から東京圏への転入超過が変わらない。地方では仕事，家庭，育児などでの女性のロールモデルが少ない

のではない。従来の社会には長男の嫁との役割像もあり、また、地方ではお茶を入れるのが女性の役割ということに不自然さを感じる人が相対的に少ないなどと書かれていた。他にも日本経済新聞では東京大学の山口慎太郎教授が、日陰の役割は女性に割り当てられることが多い、女性は日陰の役割をお願いしても断らないだろうと思うリーダーがいてと指摘していた。組織にとっては日陰の役割でも、重要であるからそれを適切に評価し、人事考課に反映すべきだし、そうした仕組みが必要だとの指摘もあった。先ほど塚原氏から企業のガイドラインを作るべきとの指摘があったが、市が原案を作るのはどうかと思う。経営者や中小企業主の皆さんに問題意識をもってもらって、市や市議会も賛成したなかでみんなが作った一案とした方がいいのではない。また、カタカナや横文字がないものにすべきだ。

- ・東京はものすごい数の観光客がいて、女性トイレに行列ができてるのが目立つ。ビジターを受け入れる、もてなすためには、女性トイレの問題はしっかりしていた方がいい。
- ・財源だが、より根本的に歳入を増やすためには企業誘致が必要となる。先ほど野村氏が指摘していた株式会社の形で農地を所有することは、国会の与野党に反対があった。しかし、今は農業の主体もいないし、休耕地も増えている。こうしたことを踏まえると、函館市からは代議士を2名選出しているので、この両名に頼んだら展開が変わるのではない。
- ・函館の強みとして水産業や食品製造業。データセンターの誘致も冷涼な北海道は有利である。函館の経済団体のネットワークが重要になってくる。日本商工会議所の小林会頭は1990年代に函館に出向した方で函館に愛着がある。ぜひご紹介したい。来年、函館商工会議所は創立130周年とのことであるから、商工会議所と相談されたい。
- ・観光一本槍ではなく、企業誘致や滞在型と併せて3本柱にすべきだと前回申し上げた。道南地域としては大沼などで自転車のイベントがあると多くの方が来るのではない。インフラの問題もあるが、そのようなスケールのことも検討されてはいいか。
- ・今回は個別具体的なことだけ申し上げた。ぜひこういうことが刺激となって少しでも前に進めることができればいいと思う。

市長

- ・女性のロールモデル、財源確保という面での企業誘致についてなど幅広く意見をいただいた。参考にしながら取り組んでまいりたい。

丸谷 智保 氏

- ・「インクルージョン未来都市函館」や「ウェルビーイング22」なども当然掲げなければいけないが、観光、景観、食の素晴らしさ、歴史、陸・海・空の拠点など函館が持っている魅力をさらにどう上げていくか、アピールしていくか、いわゆるブランドマネジメントは急を要するのではない。
- ・教育機関もしくは訓練校のような形にして、全国からそういう人材を募るというよ

うなことをしながら、インターンシップ等も駆使して、幅広い観光人材を育てていく。マーケティングにもつながるよう幅広い人材教育が必要だと思う。

- ・DMOを道南各自治体に置き、函館市はその中心として南北北海道地域のブランドの発信を世界に向けて行っていくというような役割を担っていったらどうか。それだけの役割を担えるだけのブランド力が函館市にはあると思う。沖縄のように徹底的に力を入れるべきだ。道南はまだ全体で取り組んでいるようには見えない。
- ・食と観光を絡めたマーケティングがうまくいくと、ブランド力の向上や移住・二拠点居住のニーズが高まると思う。住居を持つ人が増えれば、人口増にならなくても固定資産税収が増加する効果もある。
- ・トップ10を目指すということはすごくいいことである。そのためにマーケティングしてほしい。

市長

- ・各都市の具体例を挙げ、含蓄に富んだご意見をいただいた。DMO・マーケティング・人材の育成など、それぞれの項目が一つにつながる。参考にしてまいりたい。

フリーディスカッション

飯村 亜紀子 氏

- ・市役所が中心になってやるようなこともあれば、商工会議所や若い人が集まるようなところ、例えば ISARIBI withなどを巻きこみ、むしろ、そちら側にお願いするなどの仕掛けも必要ではないか。どういう時間軸で取り組むのか、誰が担うのかを整理して進めていくべきではないか。市民との情報共有を図り、「自分事」に感じてもらえるようにしていく必要がある。

市長

- ・「自分事」でなければ何も進まない。これまでとは違う取り組みを考えていかなければならない。

伊藤 隆敏 氏

- ・地方創生はこの10年言われてきたが、全然、人口減が止まらない。これまで様々な施策に取り組んできた中でうまくいったものがあるのかどうか。あったとしても非常に少数であり、全然、人口減が止まっていないということだ。他都市の施策を並べてみて、効果が多少あったもの、なかったものを分類することは、本来、中央政府のやることだと思うが、そういう分類をやることも考えられる。
- ・函館に住んでいる男女に、函館からどうして出たいと考えたのかということ聞いてみる。あと、函館を出た人にはどうしたら帰りたいと思えるのか、どういう条件だったら帰るのかというようなことを聞いてみると何か答えが見えてくるかもしれない。当事者に聞くのが最初ではないかと思う。

市長

- ・当事者に聞く，これをしっかりやらなければならない。なぜ函館を出ていってしまうのか，なぜ帰ってこないのかということを突き止めていく。

伊藤 正裕 氏

- ・住みたい，引っ越したい，訪れたい，憧れの街である地位を盛り上げていくことによって，交流人口，関係人口，定住人口と増えていくということが皆さんの意見に共通するものだと思う。スモールウインの積み上げだと思うので，今度は，今すぐできること，5年かかること，10年かかること，財政的にできること，できないこと，住民の皆様の理解を得られること，得られないことに分け，スモールウインを重ねていくことが極めて大切であると思う。

市長

- ・ワークショップスタイルがいいのか，住民の皆さんを巻き込むやり方をしっかり研究していきたい。声を聴いていくことの大切さを感じている。

大西 雅之 氏

- ・函館の路面電車はすごく魅力的だと思っているが，オーバーツーリズムが発生している。路面電車では特に函館駅前，それからロープウェイもそうである。これは何とか解消していかななくてはならない。今年，サンフランシスコのケーブルカーに乗ったが，あの魅力は素晴らしい。元町エリアも坂が多いので，サンフランシスコのような路面電車もしくはケーブルカーを函館山の山麓まで走らせて，それ自体が函館らしさのシンボルにすること，さらには，山道を非常に魅力的にする工夫をし，歩いて登ることもできるようにするなどの未来図をイメージできないだろうかということを感じている。
- ・湯の川まで行くと路面電車に乗ることができるが，空港から湯の川までを高速化してつなぐことのも面白いのではないか。
- ・函館のように歴史的な背景を持ったまちは少ない。戊辰戦争の話はよく聞くが，それよりも前の，北前船の高田屋嘉兵衛などの先人の歴史についても，市民大学の市民講座などのカリキュラムにしっかり載せたほうがいい。

市長

- ・空港までの路面電車の延伸に関してはこれまで何度か話題に上がったことがある。課題は多いが，非常に夢のある話で研究の価値があると思って伺った。
- ・高田屋嘉兵衛を含めた歴史文化についてもこれから掘り下げてまいりたい。

塚原 月子 氏

- ・市民の皆様の実情を踏まえてやっていくということが必要だろうと思いつつ，市民

の皆様にも「自分事」として取り組んでいただきたいと思います。

- ・インクルーシブ教育は、丁寧に公教育でやっていこうとするとリソースが足りないし、子どもが減少する中では大変である。そのため、教員だけではなくても全然いいだろうと思う。例えば、函館の初等教育に関わる人も学校内の教員だけではなく、全国・海外からバーチャルで繋ぎ、様々なことを教えることができればと思う。また、それも関係人口づくりにつながると思う。

市長

- ・市民が「自分事」として意識できるよう、市民・行政・経済界も交えたディスカッションがあっていい。話し合いの場をしっかりと持っていきたい。

野村 修也 氏

- ・昔、夜景の日というのができて、市民運動が行われたと記憶している。同様の気持ちを市民の間に生み出すことができれば、函館の復活に繋がっていくのではないかな。ぜひ旗を振ってみるといいのではないかな。
- ・函館に住んでる方が他地域と関係を持つことによって、その地域の人が今度は函館の人と関係を持つことになる。市民の方々にそういう生き方もあることを発信していくことで、函館をより一層、好きになったり、函館が大事に思ったりというようなところに結びついていくのではないかな。
- ・青森と函館は地理的にも、文化圏としても非常に近く、言葉も近い。青森と函館を一体化して何か発想することによって、お互いにそれぞれが関係人口化していく必要があるのではないかな。

市長

- ・「夜景の日」は大変盛り上がった。函館にはそういうことができる市民力がある。市民それぞれが色々なつながりを持っていると思うので、必ず関係人口にもつながってくると思う。

長谷川 榮一 氏

- ・インクルーシブという言葉は、元々格差が非常に拡大し、貧困などで恵まれない方に関して、国際会議の議題などで一時期使われており、それが一つの発展系としてSDGsとなった。函館には函館の歴史や市民の未来のビジョンがあるからアイデンティティを維持すべきである。Inclusivenessの“i”だけではなく、identityの“i”も必要だ。
- ・国際会議を行うこともブランドを世界に発信することになり得る。私は2019年に開催された倶知安のG20観光大臣会合のお手伝いをしたが、倶知安にはスイートルームが多いことに着目した。大事なことは国際会議場よりも関係者の宿舎であると言って開催の背中を押した。国際会議の開催は政府が決めることだが、函館には湯の川のようにビジターが来ているので、一つのメニューとして頭に置いていただければと思う。

- ・先ほども申し上げた自転車について、道路整備をしなければならないが、距離的には大沼1周もいいと思う。もう一つ力を入れてほしいのが世界中で流行しているスケートボードであり、大会ができないだろうか。確か日本の街の中で開催したところはないと思うので、そうした大会に少しでもビジターが来てくれればいい。

市長

- ・函館山の混雑ぶりに対処するのはなかなか難しい。今は、可視化したり、時間や場所を分散させる実験をしているが、何とかやり遂げなければならない。函館山のオーバーツーリズムを解消し、強みに変えていくよう取り組みたい。
- ・国際イベントの誘致は、都市ブランドの向上に効果があるということを今年の夏に開催したモルックの世界大会で実感した。コンベンションについても誘致してまいりたいと思うので、アドバイザーの皆様のお力もお借りしたい。

丸谷 智保 氏

- ・十勝の池田町は1960年代にブドウ作りからワイン造りを始めた。誰も何も知らなかったのが海外に役場の職員を派遣した。10人以上は送っていたと思う。それが60年後の今はワイン事業特別会計が一般会計を補填している。当時はずいぶん叩かれたようだが今に繋がっている。シーズのないところに無駄なお金使うのは良くないが、函館はシーズがあり、ポテンシャルの高いまちだ。躊躇せず投資をして、マーケティングをし、さらに高めていくことに、思い切って4年と言わず8年でもいいので取り組んでほしい。

市長

- ・池田町の事例に驚いた。改めて、人材をどのように生かしていくのかということをも深く考えさせられた。

閉会にあたっての市長挨拶

- ・今回の資料を踏まえ、これから具体的にどのように進めていくのか、そこにアドバイザーの皆さんのお知恵、お力を賜りたいところが多分に出てくると思うので、この意見交換会の場以外でも個別にご指導をお願いしたい。
- ・市民の皆さんがどう思っているのか。そして、それを「自分事」としていく。それが今回の大事なテーマだったと思う。
- ・関係人口もアドバイザーの皆さんが共鳴をされ多くのご意見が出た。日本全体の人口が減っていく中では、それぞれの都市の市民が他の都市の関係人口になっていくという方向しかない。行政が触媒として関わり、Win-Winになっていく。もっと考えなければならないテーマだと思う。
- ・観光についても多くのご助言をいただいた。函館は観光一本足に近い形でずっとやってきた。それでは人口減少を止められないという結果は出ている。一方で観光を推進することによって都市ブランドに磨きがかかるのも間違いのない事実である。その意味でも観光についてさらに深掘りをして、足腰を強くしなければならないと

感じている。

- ・ 交流人口，関係人口そして定住人口，それぞれについて短期的にできるものについては対応していく。また，中長期的に対応しなければならないものは各種計画やビジョンなどに反映をしながら着実に進めてまいりたい。
- ・ 今後ともご支援のほどよろしくお願いしたい。